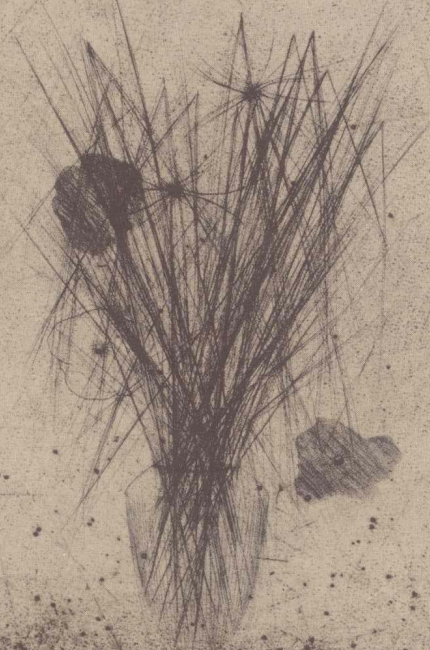


狭き門より

芹沢光治良



狭き門より

芹沢光治良



新潮社版

^{せま}^{もん}
狭き門より

昭和51年8月20日 発行

昭和51年9月25日 2刷

定価 980 円

著 者 ^{せり ざわ こう じ ろう}
芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 ^{株式}
会社 新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71

振替東京4-808

印刷・二光印刷株式会社 製本・大口製本
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
© Kojiro Serizawa 1976 Printed in Japan

狭
き
門
よ
り

——これは、ジュネーブで夏を過した時（一九七四年）から一年ばかりの間に、数回、見知らぬ女が深夜、枕辺に現れて、書いて欲しいと切々とうったえる如く語って、作者を苦しめた物語である——

第一章

おんなには、誰にもこんな感情になることがあるのでしょうか。平和に暮しているのに、夫のそばをはなれて、何処か遠くへ独りで行ってしまいたいと、やもたてもたまらないようになることが。それとも、わたしは子供がないから、そんな感情の湧きあがるのを、わがままとしておさえられないのでしょうか。

その感情を言葉にして、夫にうったえるのは、はばかりがあつて、なかなかできなかったが、ある夕、全く無意識に夫に言つてしまったのです……旅に出たいわ、ゆっくり独りで……と。

その時、夫が、なにばかを言うかと叱ってくれるか、いつまでも小娘のようなことを言つてと、笑つてしまうか、または、優しく抱きすくめてくれるかしたらば、それでおさまつたろうに、夫は驚いたように黙つて、わたしの顔を見上げるのでした。真面目くさつて、生気のないような夫の蒼白い顔を見ると、いやだ、いやだ、と胸に突きあげるものがあつたが、その瞬間、夫は——旅つて、何処へ行くのだね、と言うのです。その調子には、行きたいなら行くさというような、なぜやりが感じられたから、わたしは決然と、それまで考えもしなかつた町の名を挙げてしまいました。その町の名を挙げてから、たいへんなことを言つた、と内心慌てたが、

「あんな田舎町、面白くもなさそうだね。数年前に通つたことがあるが、見る物もなくて、眠つた町だったよ——」

「その町に父がいるかも知れないですって——」

そう言わざるを得なかったけれど、夫はさぞ驚いたことでしょう。父のことは少女の頃に死んだものと、言いきかされて、その後氣にかけたこともなく、夫と結婚する時にも、父のことが話題にならなかったし、その日まで、夫にもわたしにも、父は存在しませんでしたから。

「母が亡くなる前に、そんなことを言ったのですから——」

「なんだ、そんなことがあったのか……それで、会いに行くのか」

「別に、会いに行くなんて……ただ母の一周忌の前に、その町だけでも見ておきたいと思ひまして……わたしは父が死んだものと思つて育ちましたし、今更父が生きているなんて、迷惑なくらいですもの。だつて、母が亡くなった時、これでこの世に氣にかかる人がなくなつて、さっぱりした、と吻くちづとしたくらいですものね。会いに行くなんて、断然しませんわ」

そう、わたしは笑つてしまつたが、翌日、小さな鞆に身のまわりの物をつめて、旅支度をしたのを、夫はとめもしませんでした。出掛けに、二、三日で帰りますからと言うと、ゆっくり田舎でいい空氣を吸つて来るさ、とわたしの旅立ちを喜んで見るようにも見えました。家事や夫の身の廻りのことは、夫の仕事の助手をしている四人の青年のうち、比野が夫のお氣に入りで、わたしが留守の間、すべて代つてしてくれるし、わたしも心配することはありませんでした。

さて家を出たものの、何処へ行つてもよかつたのです。ごたごたした家事をはなれ、夫や助手達の顔の見えない処へ行きさえすれば……そのうえ、好きなスケッチでもできれば、氣が晴れますが、その日は、夫にあんなことを言つたてまえ、あの町へ行かなければならないような氣がして、上野に出て汽車に乗りました。その町は母の住んだ都会——というより、わたしの故郷より、普通列車で四、五十分手前の小さなB町なので、途中の風景も目新しいものもなく、わたしは列車で揺られながら、自然に、記憶のなかを模索したり、他人から聞いた話の断片をつなぎあわせ

たりして、死んだ筈だった父を、想像のうちに創りあげていました。

父は母が最期に言ったその町の生れであったそうです。独り娘である母のところへ養子に來たことは確かですし、大きな病院の経営者で医学博士の祖父の相続者である母の養子になったのですから、父も医者に相違ありません。父は九州の医科大学の教授になれる地位にあったのに、墮胎罪を犯したという疑惑で、有望な地位から追われて、九州にも住めなくなつたと、母は最期の日に話したが、それはいつで、一体どういふことがあつたのでしょうか。わたしも一つ年下の弟の守人も九州生れですから、父母が九州にいたのは確かですが、わたしには微かに父の記憶があるけれど、その記憶のなかに、父方の祖父母の家と考えられるものが一つも、まじりあつていません。父が九州を追われたというが、母やわたし達は、その前に母方の祖父母の処へもどつたようなのに、父は何故、母やわたし達のいる処へ來なかつたのでしょうか。一体何処へ行つたのでしょうか。

母の遺品の整理をしたところ、不思議なエハガキが三枚、ていねいに紙に包んで文箱の底に納めてありました。二枚はバリの街の風景でしたが、突然、美子よ、というインクの色あせたペン字が目に見え込んで、わたしは息がとまりそうでした。わたしに呼びかけているものですか――

「美子よ……今日、ルクサンブル公園をぬけたところ、池のそばで、可愛い美子が他の子供と遊んでいるのです。びっくりして、しばらく立って見ていると、美子が振向いたので、駆け寄りそうになったが、青い目の女の子でした。街のなかで、よく美子や守人の後姿を見かけることがあるが、気のせいでしょう。美子はアンデルセンの話が好きでしたね。日本へ帰るまでに、アンデルセン小父さんの墓へお詣りします。」

父

父、この文字をじっと見つめたものです。父、これは誰であろうか。美子よと、わたしに呼びかけているが、わたしに話しているようでもあり、そうでもないような文章です。父と書いているこの人が、わたしの父であるならば、父はパリに留学したことがあったのです。父が外国へ留学したとは、一度も聞いたことがなかったけれど……このエハガキは確かに、パリの名所であるコンコルドの広場から、遠くシャンゼリゼの方を望む美しい風景です。そして、宛名を書く方にも、文章を書いてあるので、これは封筒に入れて郵送されたのにちがいないが、封筒が残っていないから、何処で受取ったかもわかりません。日付もなし、パリのアドレスもあります。ただ母が大切に保存していたところを見ると、母が受取人だったのにまちがいありません。それならば、何故母はわたしに見せてくれなかったのでしょうか。何故話してくれなかったのでしょうか。他の二枚のエハガキは、一枚がルーブル美術館を外から見ただけのもので、もう一枚はミレーの「晩鐘」で、(一)と書き加えてあります。インクの色は同じようにうすく変色して、ペンの同じ手蹟です。わたしは急ぎ(一)から読んでみました――

「美子よ……お前は覚えているだろうね。九州のおうちの隣りに、清人君きよとというお前ぐらいの男の子が、住んでいたことを。よく遊びに行って、時どき喧嘩をしたようだったが……」

お父さんが藤岡勇という大学の若い先生で、奥さんがきれいな声で、庭の方から、お母さんに話しかけるほど親しくしていたけれど。その藤岡先生と奥さんに、思いがけなく、このパリで会いましたよ。ベルリンに暫く滞在して、数カ月前にパリに移ったそうで、フランスでは一年ぐらい、みっちり法律を勉強するのだと、話していました。

清人君は奥さんの実家のご両親へあずけて来たそうです。奥さんに、淋しいでしょうと、きいたところ、奥さんは子供のことを思い出す暇もないほど、幸せですからと、あの美しい声で笑っ

ていました。ヨーロッパへ来て、文明というものが、どんなものか初めてわかって、その文明の有難さに毎日浴して、幸福だとも話していました。そして、この文明がどんな風にしてつくられているか、そのなかで女の役割が何であるか、それを勉強して、日本へ帰ってから、日本を文明国にするために、ご主人に協力して、力は弱くても女の役割を果したいと、真剣な顔で語っていました。

お隣りで折にふれてお会いした頃の奥さんと、全くちがうくらいでした。そのことを奥さんに話したところ、それくらい変らなければ、洋行した甲斐がありませんと、答えるので、なんとも申しようがなかった。

安東さんは奥さんをおつれにならないで、独りで洋行するなんていけませんわ。だから日本人は野蛮人だなんて、言われるのです——と奥さんに叱られて、閉口頓首しました。

美子やお母さんといっしょにパリに来ることができたのなら、お父さんも幸福で、文明人になれたのにと、藤岡助教授夫妻にバリでお会いして、初めて思いましたよ。

父

美子よと、わたしに呼びかけているが、わたしに宛てた手紙ではなく、明らかに母に書いた文章です。母への手紙であるから、母が大切に保存したのでしょうか。それなら何故、扶喜子よと、直接に母に呼びかけなかったのでしょうか。

そう考えると、母が息を引きとる二日前に、わたし一人、枕もとで見とっていると、かつて一度も口にしたことのなかった父のことを、断片的にさまざま口走ったことが思い出されました。あの時は、病気が頭脳を冒して、一種の錯乱状態での譫言であらうと考えて、ただ悲しく、母の口にすることを、事実として受けとめないで、死にひんする母の妄想であらうと、涙をこぼしながら、早く黙ってくれますように、そればかり念じていました。二、三時間して、ようやく黙っ

てくれたが、それと同時に、母は昏睡状態に陥ちいったのでした。

しかし、三枚のエハガキを読んだとたん、母の謔言の断片が記憶のなかから飛びあがり、あれは母の謔言ではなくて、ずっとわたし達に秘密にしておいた父と母との関係を、最後に打明けておこうとした切ない言葉であつたろうと、気がついたのです。してみると、母はわたしといつしよに弟の守人も枕もとにいるものと、考えたのでしようし、あの時、弟を枕もとに呼ぶべきであつたのに、わたしは愚かにも気がつきませんでした……

あの謔言のなかには、こんなことがありました——

「お父さんが突然警察につれて行かれて、途方にくれてね。取調べだからって、その夜も、次の日も返してくれないで、心配したけれど……お父さんは警察で調べられるようなことをするお人ではないのに……三日目でしたか、恥ずかしい墮胎罪を犯したと、でかか新聞に書かれましてね。もう恥ずかしくて、人前に出れなくて、門を閉じてうろたえていましたよ……心細くて、心細くて、故郷から祖父さんが使いの者を迎えによこしてくれてね。助け舟が来たように、大急ぎでお前達をつれて使いの者と故郷へ帰りましたよ。婆やを残して……お父さんが無実になつてもどるまで、避難して待つつもりでしたのに、とうとうお父さんは家へ帰られなかったよ。そればかりか、それっきり、お父さんの顔も見ないでしまつてね……あとで婆やが家をかたづけ帰つて来るなり、あの旦那様が若い芸子の墮胎をしたなんて、そんなこと、為にする誰かのつくった嘘ですと、お母さんの前に泣き伏してね……お父さんも、きっとここへ帰つて、お母さんや祖父さんに、真実を話してくれるものと、わたしは信じて、待っていました……ついにどりませんでしたよ。それもそのはず、お父さんはあの厭な警察で死んだようなものですものね——」

すると、バリに行つて、このエハガキを書いたのは、その前のことでしょうか。文章から見ると、その後の筈ですが、罪人でなかったから、洋行できたのではなかったでしょうか。それなら

ば、何故ここに帰って、母に会わなかったのでしょうか。エハガキに書かれた隣家の清ちゃんが、わたしの記憶のなかにも、おほろげながらあります。してみると、その墮胎事件の後に、父は洋行したのにちがいないが、大学から洋行させてもらったのでしょうか。

その時、わたしはこのエハガキを弟に見せ、母の謔言をも伝えて、父のことを弟と話した方がよくはないかと考えたが、弟の嫁のことや祖父の亡いあとと弟といっしょに病院をやっている代診の先生方や看護婦などのことを思うと、忘れてしまった父と母との秘密が、再びあかるみに出るような怖れで、躊躇（ためら）ってしまいました。母は亡くなったのですし、父は弟にとっても幼年期に死亡したことになるので、今になって父の生存が確認されるようなことにでもなったなら、新しい面倒や厄介が弟の身に振り掛らないともかぎりません。わたしの胸に納めてしまえば、父も母も生存しなくてもすんでしまう……そう覚悟して、わたしは慌てて、エハガキをハンドバッグの底にかくし入れたのでした……

わたしは上越線の列車の窓に目をやって、ぼんやり考えていたのです。

あの九州のお隣りの清ちゃんのお父さんは、藤岡勇というお方でしたが、九州の大学教授で、それからずっと後に大学に思想問題が起きたりして、大学を辞められて、東京で弁護士をしている有名な藤岡博士ではあるまいか。新聞で写真を幾度も見たことがあります。藤岡勇博士、この名前は、はっきり心にきざみこんでおきましょうと。それにしても、あのB町へ行こうと、この汽車に乗りこんだのは、謔言のなかで母が話したことが、わたしの芯（こゝろ）の方に染みついて、突然にわたしを動かしたのかも知れません……

しかし、父がああB町の出身者で、中学生の時に、たいへんな秀才で、中学の校長先生の推薦で、祖父の氣に入って、わが家の養子に選ばれたということを知ったような気がします。いつ、

誰から聞いたか、どうしても思い出せないが、愚痴っぽかった祖母だったかも知れません。

わたしが東京で勉強するようになったころ、世の中も騒然としていましたが、物が不自由でしたから、祖母は心配して、女子が、何も学問せんでもと、口癖のように申しますから、わたしは祖母の話は老人のたわごとのように聞き流して、心にとめませんでした。そのころ、弟は一日も早く医者になつて病院を継ぐようにという祖父の希望に従つて、土地の医学専門学校に入学して（それが間もなく大学になりましたが）真面目に勉強していたので、祖父の自慢の相続者でしたが、祖母まで、わたしに愚痴を言うのに、必ず弟を引きあいにして責めるので、辛かったものです。そうです、思い出しました。祖母が愚痴のなかで、こんなことを申したことがあります。

「おまえさんは扶喜子の悪いとこばっか似たんだね、扶喜子も東京のその学校ばっか行きたがつて、わたしを困らせてね。祖父さまは、自由主義の学校だから駄目らと、反対ばっかしなざるし、わたしはほんのちつとれも左足の悪い扶喜子を、旅の人（東京の人）に見せとうないからね。そう言つてとめたら、扶喜子の心を痛める心配もあつてさ、なんにせ、気位の高い子だったすけね……ただ祖父さまが駄目らと嘔鳴つてやめさせたるも、泣いてしても、二日もご飯を食べねでもてね。死になさつたお父ツアまに、わざわざ来てもろて、話してもらつたおかげで、やっとやめてもろたんも……その学校から出ている雑誌を毎月買つて、挙句の果てに、その雑誌の友の会とか、なんとかいいう会を、この町でつくつて、皆さんを集めたり、東京から先生が来られたりして、毎年大袈裟にさわいで、扶喜子はやつと満足しなかつたようだが……執念深いというのか、今度はお前さんをその学校に行がせて、自分のできねかつたことを、代つてさせるんだもの、わたしは行がせなくなかつたんだよ……美子、聞いていますか。駄目な子だね……ただ守人の方は、ありがたいことに、おまはんとちがつて、すなおで、真面目な勉強家で、成績もようて……死になさつたお父ツアまに似たのだらうかね。あの人はいつも成績が一番だったから、名古屋の高等

学校へも試験なしで入れてもらい、大学へ進む時も、特別に無試験で九州の大学にはいりましたよ。入学試験を受けて東京の帝大に行くというのを、祖父さまが一日も早う医者になりたい言うもんで、我を張らねえで、すなおに九州へ行きなされたよ……」

してみると、父はあの町の中学生であつたころ、祖父に見込まれて、安東病院の養子になり、将来独り娘であつた母の婿養子になるために、わが家に引取られて、医者になる教育を受けたという事です。高校も大学も無試験入学を許可されたとは、それだけでも秀才だったことがわかります。でも、父の実家があのB町にある筈ですが、わたしは父か母かに連れられて、父の実家を訪ねた記憶がありません。父の実家の人——例えば、父の両親や兄弟に会つた記憶もありません。この人々が誰かわが家に来たことがあれば、きっとわたしも会っているのですが、結局、物心ついてから、わたしの家と父の家とは付合いがなかったということでしょうか。一体これはどういう意味があるのかしら——

列車があつた町に着いたと告げられて、慌てて網棚から小さな旅行鞆をおろすなり降りたが、わたしの他には一人の乗客しか降りないようなわびしい駅でした。秋風がホームに流れて肌をさし、わたしも無意識のうちに心が引きしまりました。そして、停車場を背にして、町に向つて立つた時、何か夢のなかの町へでもはいるような躊躇がありました。戦後日本の町はどれも、規格品のように、新しい町に變つて、つまらなくなつたが、この町はアメリカの空襲で焼かれなかつたおかげか、もう見られなくなつた、古くて珍らしい家並が、わたしに微笑みかけていたが……この町に何しに來たかと改めて自ら訊くような愚なわたしでしたが、父の町で、ここに父がいるかも知れないからと、自分に言いきかせて、ゆっくり歩き出しました。

停車場を起点に、商家が少しばかりならんで、その裏の方に郵便局や町役場があるような淋しい町で、人通りもありありませんでした。

雜貨店、魚屋、散髪屋、きぐすり屋、埃りをかぶった青物店、小さな呉服屋、洋品店がならぶなかに、美容院バリジエンヌという看板があるのです。みすばらしい店であるが、この田舎町に、美容院バリジエンヌとは、あまりに突拍子もない名前です。隣りは信州屋、その隣りは馬蹄なし金万かねまんですから、「パリ女」とは、この町にそぐわない名です。少し行くと木の橋に出ました。幅三メートルばかりの清流が流れています。そこからは、黄色に稲のみのった田圃がひろがって、遙かに山脈が見えます。わたしは清流の畔において腰をおろしたが、あたりには小さな野菊がいつぱい咲いて、背にあたる陽が暖かでこころよかったです。あの山のトンネルを抜けたら、こちらはまだ晩秋のようで、空も澄みきって寒々しい色です。わたしは、鞆から写生帖を出しました。しかし、いやな稲架はさが目について、絵になるような風景ではありません。

ああ、わたしは父の町に来ているのだと、ようやく思いついて、橋の上にもどり、裏の通りへ出て、医院の看板をさがしたが、見当りません。通りかかった内儀おかみさん風の婦人に、この町に医院はありませんかと、訊ねてみました。近頃医者者が三軒になったとの答えに、そのなかに、安東達三という医者がおられませんかと、せきこんで問うたが、そんな名の医者は知らないと言って、不審そうな顔をするのです。父が養家を去ったのなら、安東を名のつてはいまいと気がついたが、父の旧姓を知らないようなたわけたわたしです。町役場へ行つて調べればいいと考えたものの、さて、今父が現れたら、どうするか、考えなおすと、おぞましさに身ぶるいしそうでした。左側に大きな学校があつて、制服の男女学生がたくさん門から出て来ます。門には第一中学校と看板が出ています。父の学んだ中学校であらうか、広い運動場と、町並に較べて立派すぎる校舎とが見えます。門から出て来た賢さとしこそんな中学生に訊いてみました。

「ここは大正時代からある中学校ですか」

「ちがいます。新制中学校です」